

○從 軍 僧

小野瀨 大勝 阿蘇品 淨溫 森 明禎 木内 要英

○中支布教監督

末 藤 辨 孝 助員 後 藤 良 康

擱筆に當り「若先國土を安んじて現當を祈らんと欲せば速に情慮を廻し急で對治を加へよ」と祖訓を三唱して邪想中國の迷夢を覺醒せしめ、以て東洋の和平、四表の靜謐を祈らんとするものである。(一三、一〇、一三)

文學 些 言

齋 藤 要 輪

下君、お便り拜見致しました。教學方面の私見を陳すべきには、締切が餘り切迫してゐます故、取りあへず隨想の二三を申上て失禮させて頂きます。

火野葦平の『麥と兵隊』はお讀みになりましたか。身延から出征されてゐる加藤鍊明師の書かれた陣歿英靈の木碑が達筆であることあたりから筆を起して、徐州の戦ひを目のあたりに叙述した近來の快著、改造社の宣傳を割引い

ても、かの『大地』以來の興趣は充分のやうです。續いて三部作を完成するといふのですが、著者がその身を戦塵の眞唯中に置き、いのちを彈雨の危ふきに曝しつゝ、毎日これを最後ぞと手記の頁を重ねたところ、まさに全身を以て彫りつけたスリルは、ぐんぐんと讀者へ食ひ入つて、おそらく今時の戦争文學をリードするものであらうなどと言はれてゐます。

出征した歌人達の現地詠は、このやうに華々しいデビュウは持たないにしても、その質と量とに於て、いづれ出版の曉、相當の喧傳を得ることでありませう。短歌では殊に著しい現象ですが、おしなべてリアリズムの勝利です。身を以て當處しなければ、わが想念の確乎たる裏づけは果し得ませんから、そこで國策的に文士従軍の擧もあつたわけですが、とに角も戦争が單なるチャンバラの平面描寫から救はれようことは想像されることです。リアリズムと言つても、バルザック風の逞しさでなくて、これも亦國産です。玉井伍長は兵隊の赤い糞に嘆き、争はれぬ民族的親しさを支那兵に對して考へ、東朝への林芙美子の報告には、白く呆けた綿畑のことが書いてありました。それにしててもこのやうにして、全身心を以て現實の攝取體驗に赴いた文學が、それが單に頭腦のみを駆使創作せしめた作品などよりも、もつと自然に、もつと深く讀者のたましひへ迫つて來るのは當然のことでありませう。そこには必然に筆者のエスプリが燃え、沁々とベーツスが滲み、ひたすらなる眞實が、寂びもしをりも、ものゝあはれをも提げて餘すところがないのです。

X

わが日蓮聖人の御遺文に於ても、慥にその事は明瞭であるやうです。例へば開目鈔に據つてみませう。

日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此は魂魄佐渡の國にいたりて返る年の二月雪中にしる

して有縁の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。見ん人いかにをぢぬらむ。此は釋迦多寶十方の諸佛の未來日本國當世をうつし給ふ明鏡なり。かたみとも見るべし。

現身既に龍口の波打際に斬られ終つたと思へば、今に斯く生き續くることさへ不思議、寒飢交々の中に、言々肺腑を衝いで文字。二乗作佛久遠實成の法門から本師釋尊の開顯へ、快刀亂麻を斷つ理性の透徹に傾聽するならば、その間或は血涙流涕の情緒を看過するなきやと私は危ぶむのであります。法門の事は扱ても開目抄に於て寔に私らの心搏つものは、聖祖が至信行道のその姿でありました。

今末法の始め二百餘年なり。況滅度後のしるしに鬪諍の序ついでとなるべきゆゑに、非理を前まへとして濁世のしるしに召し合せられずして流罪乃至壽いもちにも及ばんとするなり。されば日蓮が法華經の智解は天台傳教にも千萬が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はをそれをもいだきぬべし。定んで天の御計ひにもあづかるべしと存すれども一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む。還て此事を計りみれば我身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此國をすてゝ去り給へるか、かたがた疑はし。

といふところから疑ひを吾が行法に懸けて沈潛幾省慮。つひに過去の宿習を質たづして般泥洹經の文に即し、

或被輕且等云々法華經に云く輕賤憎嫉等云々二十餘年が間の輕慢せらる。或は形狀醜陋又云く衣服不足は予が身也。飲食麤疎は予が身也。求財不利は予が身也。或遭王難等此經文疑ふべしや。法華經に云く數數見擯出、此經文に云く種種等云々。斯由護法功德力故等者摩訶止觀の第五に云く散善微弱不能令ハハム動シテ今修ニシテ止觀ヲ健病不レ虧ケ動ス生死輪ヲ等云々。又云く三障四魔紛然トシテ競リ起等云々。我無始よりこのかた惡王と生れて法華經の行者の衣食田畑等を奪ひとりせしこと數知らず。當世日本國の諸人の法華經の山寺を倒すがごとし。又法華經の行者の頸を刎

ること其數を知らず。此等の重罪はたせるもあり未だ果さざるもあるらん。果すも餘殘いまだ盡きず。生死を離るゝ時は必ず此重罪を消しはてゝ出離すべし。功德は淺輕なり此等の罪は深重なり、權經を行ぜしには此重罪いまだ起らず。鐵を熱に甚う鍛はざれば玳瑁隠れて見えす、度々せむれば玳瑁あらはる。麻子をしぼるに強くせめざれば油少きが如し。今日運強盛に國土の謗法を責むれば、此大難の來たるは過去の重罪の今生の護法と招き出せるなるべし。等と開釋の悲痛なるものを經て、

我並びに我弟子、諸難ありとも疑ふ心なくば自然に佛界にいたるべし。天の加護なき事を疑はざれ、現世の安穩ならざる事をなげかさざれ。

と戒告せられる、實にその體驗の切なるものを以て、再讀三讀、ひしひしと胸迫るおもひがするのですし、従つて又、法華經の行者、末法の唱導師と仰がねば居られないのであります。

X

ひとり開目鈔に止らず、聖祖の遺された教へが殆ど日記文證の體式を裏づけてゐること、委細には遺文全集へ往見の如くであります。身を以て佛教を行じた——といふ點にも、文學としての御遺文に、凝視せねばならないものがあります。而も經典それ自身が、平板な理論の輯合ではなくて、いづれもが釋尊並びにその弟子達の行狀を連ねての立體的表現にあるのですから、佛門下に於ける我々としては、喋々たる教説の口誦受賣りに終止せず、もつと明快に私らの實際は如何様に聖教を行じ取つたか、取りつゝあるかの開顯に赴いていゝと思はれるのであります。私らの修行は、未だ未だ聖教の机上的理解に止まつてゐる傾向が多過ぎるのではありませんか。理論には出世間をかつぎ出し、實行は多分に世間的にまみれ切つてゐるのではありませんか。教のみあつて行證なし——といふのでは、聖教

と雖も益々時代人心からは遠離してしまひ、つひには吾れも亦「去曆昨食」たることを免れ得なくなつてしまひます。そこで私らに於ける緊要事は、聖祖の時代とは遙かに下つて來た今、電子やエーテルの衝動を掴み、マルクスやレーニンの洗禮を受け、肉食違犯が通常事ともなつてゐる境遇に於て、如何にして聖教は我らの實踐に叶ふかを、確乎と思索し體驗して、新鮮なる記録に齎らすべきことであります。實際、軒高く今も構へられてゐるところのあの法閣殿堂の中に於て、聖教はどのやうにして眞實に行はれてゐるのであらうか、そこに如何やうにして世人が化益されてゐるのであらうか等、私らは痛切にそれを知りたいと思ふことがあります。それが空念佛式の教説や報告書等でなく、魄力生々しいルボルタージュであるなら、それはどんなにか私らを示唆し啓示することでありませう。然るに現代に佛徒のいのちを懸けた修行體驗の記録は乏しくて、やゝもすると法燈の暗い影のみが暴露されるばかりであるのですから、これは益々反宗教の波を高めてゆくばかりであります。抗日容共の支那へ長期建設の苦行をさへ荷負ふの時、ついでに嚴として法華經の修行も展開されて欲しいと思ひます。

×

先頃、或る大學の外國文學に席を置く學生達が、いづれも作家を志望してその先輩を訪ねた事に就いての隨想が見えました。いづれの職へ就かうにも関で以てがんじがらめになつてゐる文科の門などでは、戰爭化なればこそ殊更に生きる問題は深刻なものやうです。それは又、限られた寺院數の中で因縁情實の呪縛に窒息しさうな目に遭つてゐる青年僧侶なども同様なことでせう。文學では食つて行けない——にしても、然し僧侶としては佛敎の護持傳道を天職としてゐます。且つは自らの向上が随つて吾がたもつ聖敎の位置をも、より輝かしめるものであることを思へば、良心は是非にも讀書修養を要求して來ることでありませう。單己無眷屬の本來に悲しくも市井に落魄した吾れながら、

その時にこそ輝く菩薩行が孕まれてゐるのではありませんか。斯くて信行不退轉であるところに、たゞ足りないのは
文筆表現のすべです。一管のペンよく吾が生命を久遠ならしめるといふのに、敢て筆執れぬことです。乃ち『綴方教
室』の豊田正子がよき指導に伸び立つてゐるやうに、私ら信行の同士に於ても、もつと注意して文筆の練磨が考へら
るべきではないでせうか。文は天資にも依りますけれども、よき教導に啓發されることも多いのでした。宗門に大學
教育まで者はれてゐながら、この時代に未だ一人の文筆の士も世間に行じ出でぬといふ事實は、それを育成する何人
も居なかつたといふことばかりでなく、敢て鋭出するお互の力行も今までには無かつたといふことにもなりませう。
折柄、宗門人の出征も多く、又種々の任務で戦地へ往來される人々も多いやうですから、それらの人々が率先して夫
々に生命罩めた非常體驗の記録を發表して下さつたなら、それだけでも何ら宗教を持たぬ人々の文學と異なるものを樹
立して下さるに違ひありません。(その發表機關たるべく、宗門には幾多の雜誌が待機してゐるやうです。) 文が習
はれてもそれが實用には役立たぬとならば、多年の教育も甚だ心細いものではありませんか。短歌などに關心を持つ
人でも、常に趣味的な歌作り、などばかりやつてゐて現實把握の出詠に鍛へられない者は、つひに吾が生命の直接の表
現は果せず(なましろ)にしまふやうです。私らに於ける諸々の文學形態は、もつともつと各自の信行表白の精銳なる武器であつ
てもいゝ筈です。生白い遊戯の如くに文學が弄ばれてゐるのみでしたら、それは狂言綺語として、却つて無くもがな
のこと、「文は人なり」と言へば、わが個性の表白を省みて、顧つて自らを鞭うつのですが、それ故に閑居不善を愉
しむ場合、眞實をその生命とする文學は、或はその人々から敬遠されるでありませう。さればこそ一層と、文學は我
々お互に活潑な行動を持つべきであると思ひます。

(十三、十、三十)